

令和元年6月23日現在

機関番号：32634

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13214

研究課題名(和文)「イソップ寓話集」の近代ヨーロッパにおける流布と日本への影響

研究課題名(英文)The spread of the Fable of Aesop in modern Europe and its influence into Japan

研究代表者

伊藤 博明(Ito, Hiroaki)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：70184679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：第一に「イソップ寓話集」のラテン語版について、(1)ヴァッラとバルバロ、(2)シュタインヘーヴェル、(3)ドーブ、(4)カメラリウス系に区分し、各々の系譜と特徴を把握した。第二に、イエズス会によって刊行された『イソポのハプラス』と『伊曾保物語』について、両邦語版の寓話でシュタインヘーヴェル編纂の『イソップ寓話集』に含まれていない寓話4つについて典拠を明らかにした。第三に、江戸時代にオランダから舶来された「イソップ寓話集」の司馬江漢への影響をめぐり、彼が受容したのはエンブレムブック形式の動物寓話集であることを確認した。第四に、さまざまな動物が描かれたルネサンス以降の絵画作品を調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、わが国最初のヨーロッパ俗語文学の最初の邦訳である、「イソップ寓話集」に拠るローマ字口語体『イソポのハプラス』と文語体『伊曾保物語』の成立について、典拠の詳しい探索しつつ考究した。また、江戸後期に舶来された、オランダ語によるエンブレムブックの一種(動物寓意集)として舶来された「イソップ寓話集」が司馬江漢に与えた影響について考察した。こうして、明治期以降、わが国で盛んに刊行されることになる「イソップ寓話集」の、いわば先駆となる二つの時期の受容について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Firstly, we divided the Latin versions of Fables of Aesop into four groups of (1) Valla and Barbaro, (2) Stainhaewel, (3) Dope, (4) Camerarius, and grasped their traditions and characteristics. Secondly, on "Isopo no fablas" and "Isopo monogatari" published by the Society of Jesus, we revealed the source of four fables that were not included in the Stainhaewel's Latin version. Thirdly, we confirmed that about the influence of Aesop's Fable introduced from the Netherlands in Edo era into Shib Kokan he accepted an animal fable book in the style of emblem book. Fourthly, we researched many pictures after Renaissance, in which various animals were represented.

研究分野：芸術論・思想史

キーワード：イソップ寓話集 イソポのハプラス 伊曾保物語 シュタインヘーヴェル 司馬江漢

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「イソップ寓話集」は、文禄2年(1593)にローマ字口語体の『イソポのハプラス』が、わが国最初のヨーロッパ俗語文学として現れ、続いて慶長・元和年間に文語体『伊曾保物語』が刊行された。その後は、仮名草子にその痕跡を留めることになるが、再度、江戸後期に「イソップ寓意集」はオランダ語版(おそらくはエンブレムブックとしての形態を取ったもの)が舶来され、司馬江漢はその影響のもとに教訓的な詩画図と『訓蒙画解集』を作成した。

両邦語版「イソップ寓話集」の底本については、1476年にウルムで刊行されたシュタインヘーヴェル編纂のラテン語・ドイツ語版『イソップ』に依拠していることが、小堀桂一郎の『イソップ寓話』、および遠藤潤の『伊曾保物語の原典的研究』によって指摘されている。しかし、典拠のすべてをシュタインヘーヴェル版に求めることができないという問題点が残っている。この点について研究申請者も、「ポッジョ・プラッチョリーニと『伊曾保物語』」(『埼玉大学紀要(教養学部)』、45-2、2010年)と「猫の首に鈴をつける(1):アステーミオ『百話集』をめぐる」(『埼玉大学紀要(教養学部)』、46-1、2010年)において部分的にであるが考究した。一方、「イソップ寓話集」と司馬江漢との関係については、菅野陽の論考が存在しているが、十全な研究はなされていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、イタリア・ルネサンスにおいて「再生」し、種々の内容と形態をとって流布した「イソップ寓話集」が、当時の人文主義において占めていた文化的位置と、16世紀のイエズス会の教育課程において同寓話集が果たした役割について、第二に、イエズス会の海外布教政策の中で日本にもたらされた同寓話集が、1590年代以降の日本において、ローマ字口語体『イソポのハプラス』および文語体『伊曾保物語』という邦語版として成立して経緯について、第三に、江戸時代においた新たにオランダから招来された「イソップ寓話集」の司馬江漢への影響について、文献学的に厳密な諸テキストの比較検討を行うことにより、明らかにすることである。

3. 研究の方法

- (1) ルネサンス期に刊行された「イソップ寓話集」のラテン語版および俗語版、とりわけシュタインヘーヴェル版とマルティン・ドープ版について、それらの内容と変容について検討する。
- (2) イエズス会の教育課程における「イソップ寓話集」の位置について、一般的な古典文学の学習も鑑みながら、「学事計画」などのイエズス会の文献資料を含めて探究する。
- (3) 『イソポのハプラス』と『伊曾保物語』の典拠について、シュタインヘーヴェル版およびルネサンス期刊行の諸版、さらに種々の寓話集・教訓集を含めて探究する。
- (4) 司馬江漢が参看した、オランダ語版「イソップ寓話集」について同定するとともに、彼の詩画集および『訓蒙画解集』への影響を考察し、同書の英訳を含む研究成果を公表する。

4. 研究成果

- (1) 本研究の目的の第一は、近代のヨーロッパにおける「イソップ寓話集」の流布について全体像を明らかにすることであったが、それらを ロレンツォ・ヴァッラ、フランチェスコ・バルバロ訳のラテン語系、シュタインヘーヴェル編纂のラテン語系、マルティン・ドープ編纂のラテン語系、ヨハネス・カメラリウス編纂のラテン語系にまとめて、各々の系譜と特徴を把握した。

(2) 第二は、イエズス会の海外布教戦略の中で日本にもたらされた「イソップ寓意集」が、1490年以後に日本でローマ字口語体『イソポのハプラス』、および文語体『伊曾保物語』に結実する経緯について、具体的には、両邦語版の寓話で、シュタインハーヴェル編纂のラテン語訳・ドイツ語訳『イソップ』の中に含まれていない4つの寓話について典拠を明らかにすることであった。

調査の結果、その内の2つの寓話については、シュタインハーヴェル版からのスペイン語訳（1546年にアントウェルペンで刊行、1551年に再刊）に新たに収められた寓話から採録されていること、またこのスペイン語訳が両邦語版の典拠となっていることが確証された。残りの2つの寓話については、一方はイタリアの作家アステミオ『百話集』第2集に掲載されているものと結論し、他方は中世末期のオドー・オブ・シェルトン『寓話集』、あるいはそのスペイン語版『猫の書』に含まれていると推測したが、両寓話の日本への伝達経路について明確に指摘することはできなかった。

(3) 第三は、江戸時代において新たにオランダから舶来された「イソップ寓話集」の司馬江漢への影響を具体的に明らかにすることであったが、この点については、彼が学んだのがエンブレムブック形式の動物寓話集であることを追認したに留まった。また、その影響のもとに作成された、江漢の『訓蒙画解集』の英訳の準備作業を行った。

(4) 当初の研究計画においては明示していなかったが、「イソップ寓話集」にしばしば登場する動物が、ルネサンス以降の美術作品において、いかなる寓意的な意味を担っているのかを調査した。さまざまな動物が、アレゴリー画のみならず、風俗画や肖像画、また宗教画にも多数描かれているが、詳細な分類と分析は今後の課題である。

本研究において中核として位置づけたのは、上記(2)で簡潔に述べた、二種の邦語版「イソップ寓話集」の典拠の探究であり、以下、研究結果について少し詳しく紹介する。

邦語版に含まれ、主たる底本と位置づけられたシュタインハーヴェル編纂のラテン語訳『イソップ』に見いだされない箇所は、イソップの生涯の記述において、『伊曾保物語』上(14)の「中間とさぶらひと馬をあらそふ事」、中(7)「伊曾保人に請ぜられる事」、そして寓話部において、同下(17)「鼠の談合の事」、(28)「鳩と狐の事」、(30)「人の心のさだまらぬ事」、(34)「出家と盗人の事」である。

シュタインハーヴェル版は、さまざまな選集から寓話を採って編集されており、合計で164にのぼる寓話を含んでいる。1488年にトゥールーズで刊行されたスペイン語版はいくぶん構成が複雑であるが、結局、シュタインハーヴェル版の寓話をすべて含み、そこに3つの寓話、「17 悪魔と悪い老婆」、「21 猿とナッツ」、「22 驢馬を売りに行く父と子」を加えている。これらはいずれもイタリアの人文主義者ポッジョ・ブラッチョリーニの『笑話集』から採られている。そして留意すべきは、かねてより、ポッジョが典拠ではないかと指摘されていた、『伊曾保物語』下(30)「人の心のさだまらぬ事」に対応する、「22 驢馬を売りに行く父と子」がこのスペイン語版に見いだされることである。

次に注目すべきスペイン語版は、アントウェルペンで16世紀の中頃（スペイン国立図書館のカタログでは1546-47年、コンタレロ・イ・モリによれば1541年）に刊行されたものである。このスペイン語版は、「イソップ寓話集」と、『カリーラとディムナ』と呼ばれる、東方起源の寓話集のスペイン語版『世界の虚偽と危険に対する範例』との合本である。後者の部分は合計で17の寓話から成っており、その最後は、「鳩と狼、すなわち、他の者たちには助言を与えようとして、自分自身には与えることができないものについて語られる」というタイトルの

寓話である。そして、これが『伊曾保物語』下(28)「鳩と狐の事」の典拠と考えられるのである。

ただし、アントウェルペン刊行のスペイン語版が、『伊曾保物語』全体の典拠と見なすには大きな障害が存在している。すなわち、この版は、同下(29)「出家と糸の子」に対応する寓話を欠いているからである。他方、1546年にアントウェルペンで刊行されたスペイン語版は1448年のトゥールーズ版のすべての寓話に加えて、「驢馬を売りに行く父と子」と「鳩の狼」の両方の寓話を収めている。この版は1551年に同地で再版されており、これらスペイン語版のどちらかが、『伊曾保物語』の、原典の一つであると考えられることができるだろう。

残りの二つの寓話、すなわち、下(17)「鼠と談合の事」と下(34)「出家と盗人の事」の内、前者については、中世とルネサンスにおいてさまざまな説話集、寓話集に採録されている有名な寓話であり、直接的にはイタリア人作家のアステーミオ『百話集』第2集に採録されたもの(16世紀のラテン語版「イソップ寓話集」にも所収)を典拠と見なしてよいであろう。

他方、「出家と盗人の事」の典拠として、13世紀にイングランドで活躍したオドー・オブ・シェリトンの『寓話集』の一話が挙げられている。この作品は13世紀にスペイン語訳が成立しており、『猫の書』と題されていた。たしかに、両者に含まれた寓話(スペイン語訳では「鷲と鴉の譬え」と「出家と盗人の事」)の間にモチーフの類似は見てとることが可能ではあるが、そこには他の三つの寓話のような正確な対応を見いだすことはできない。

さらに、オドー・オブ・シェリトンの『寓話集』も、そのスペイン語訳の『猫の書』もルネサンス期には刊行されておらず、前者が初めて活字となったのは1868年であり、後者は1860年である。結局、この寓話の典拠についてはさらなる探求の対象に留まっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

伊藤 博明、パラッツォ・オルシーニの12人のシビュラについて、専修人文論集、査読有、第103、2018、pp.51-101.

伊藤 博明、スペイン版「イソップ寓話集」と国字本『伊曾保物語』、埼玉大学紀要(教養学部)、査読有、53(2)、2018、pp.1-13.

伊藤 博明、セッサ・アウルンカ大聖堂のシビュラ像について、専修大学人文科学年報、査読有、48、2018、27-67.

伊藤 博明、サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂のシビュラ像について、専修人文論集、査読有、2018、102、127-159.

ロバート・パートン、伊藤 博明 他訳、『憂鬱の解剖』: 第3部第1章第2節第3項 第2章第2節第1項、京都府立大学学術報告(人文)、査読有、70、2018、1-42.

ロバート・パートン、伊藤 博明 他訳、『憂鬱の解剖』: 第3部第1章第1節第1項 第2節第1項、京都府立大学学術報告(人文)、査読有、69、2017、77-98.

〔学会発表〕(計4件)

伊藤 博明、ホラポッコ『ヒエログリフ集』の諸版と諸訳について、エンブレム研究会、2019

伊藤 博明、18世紀のメキシコ美術に対するエンブレムブックの影響について、エンブレム研究会、2018

伊藤 博明、アントニウス・ヴィーリクス『愛するイエスの聖なる心』をめぐって、エンブレム研究会、2018

伊藤 博明、モザイク・テキストとしてのチェーザレ・リーパ『イコノロジーア』、エンブレム研究会、2017

〔図書〕(計8件)

ホラポック、伊藤 博明訳、ありな書房、ヒエログリフ集、2019、230

伊藤 博明 他、ありな書房、光彩のアルストピア、2019、231-258

伊藤 博明 他、ありな書房、黎明のアルストピア、2018、388-412

伊藤 博明、集英社、象徴と寓意：見えないもののメッセージ、2018、99

リナ・ボルツォーニ、伊藤 博明 他訳、ありな書房、クリスタルの心：ルネサンスにおける愛の談論、詩、そして肖像画、2017、622

伊藤 博明 他訳、名古屋大学出版会、原典ルネサンスの自然学、2017、417-554

チェーザレ・リーパ、伊藤 博明訳、ありな書房、イコノロジーア、2017、430

伊藤 博明、ありな書房、ヨーロッパ美術における寓意と象徴、2017、270

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。